
Moon-Drop

水瀬雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Moon-Drop

【Nコード】

N4885H

【作者名】

水瀬雫

【あらすじ】

彼の死を受け入れられない少女のお囃

プロローグ ハジマリ（前書き）

もしかしたらR12ぐらいになるかもです。
怖いのがダメな方、グロいのがダメな方はご遠慮ください。

プロローグ ハジマリ

もう……会えないのかな……

ずっとずっとそばにいたのに

もう私は……

私は笑えない

あなたがいない世界なんて

あの時と同じだ……

あのモノクロの世界

色褪せた夢の世界

もうあんな思いは二度としたくない

だってあんなの

私には耐えられないよ……

笑えない

喜べない

泣くことすらできなくなる

声が出ない

記憶が消えてゆく

もう……

思い出したくない

あれはあなたじゃない

あの人を返して……

彼を返して……

私はまた笑いたい
あなたと一緒に笑いたい

どうしたらあなたは戻ってくるの？
幾千もの時を超えて
幾千の夢を見た

あなたがみえなくなる
わからなくなる……

私はこれからどうやって生きてゆけばいい？
私も連れて行って……
あなたのそばにいたい
あなたと共にいられるのなら
地獄の果てまでも……

気づけばいつも私のそばに
あなたはいてくれていたんだね
私は馬鹿だから
ほんの小さな幸せにも
気づくことができなかった

「永遠の時に幸せはない。幸せは刹那のなかにある
それゆえ幸せを共有するものの永遠を人は欲しがる」と

私には意味がわからなかった
でも今ならわかる気がするよ
今あなたがもう一度言ってくれたなら……

私はあなたに求めすぎた

あなたがなんでもしてくれるから
私は甘えてた

もうあなたは助けてくれないのでしょうか？
私の無茶を止めてはくれないのでしょうか？

あなたは私のそばでいつも笑っていて
あなたの笑顔に幾度となく助けられた

なのに私は……

あなたを傷つけることしかできなくて……

きつとあなたは許してくれるでしょう
いつもみたいにわらって

「俺は大丈夫だよ。きみが笑っていてくれればいい」

そういうのでしょうか？

地獄が戻ってくる……

学校なんてキライ……

キライ……キライ……キライ……キライ……キライ……
キライ……キライ……キライ……キライ……キライ……

地獄だ……

あなたを

私の樂園を

返してよ……

ずっとずっと望んでいたの

生まれたときから親の愛なんてなかった

幼稚園でも小学校でも中学校でも……

私の居場所はなかった

唯一つの私の居場所を取り上げないで……

神様が本当にいたのなら

それはとても不公平だ

人間を生み出しておいて

人間をえり好みする

私はなにかいけないことをしたの？

生まれてきたことが罪だと

そう言われ続けた

私の支えはあなただけなの

彼を返して……

私を夢の世界へ連れて逝って

私を軀の中においていかないで

ここから助け出して？

プロローグ ハジマリ（後書き）

こんな小説を読んでいただいてありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

誤字脱字などがあれば遠慮なくお知らせください。
できるだけ早く直します。

これからもよろしくお願いいたします。

第一話 ヒカリ

「ねえ……あんたさあ目障りなんだよね。消えてくれないかな？」

クラスの女子が小馬鹿にするように声をかけてくる。

だから私も、それ相応の対応をする。

「じゃあ見なきゃいいじゃない？」

「馬鹿にしてんの？あんたの席は一番前、見ないようにしたって見えちゃうのよ」

もちろん馬鹿にしています。というように言ってやる。

「じゃあ先生に言って席を変えてもらえば？」

こんな会話は日常茶飯事だ。ごく普通の学校でのいじめ。

日常ではないと思うのは小学生まで。もう、こんなのは慣れた。

父親がイギリス人。母親はキャバ嬢。当り前のように髪の色は明るい。

ちなみに名前はさいとうかなえ斉藤叶高校2年。誰も知らないような店でバイトをしている。……っていうか店かな？

多分みんなが知っているとしたらこっちの名前

あまつきしずく
天月滴

いまじゃ結構有名な歌手。兼作詞家。

作詞中心に仕事をするから知らない人も多いかも。

っていうより顔も公開してないし、ライブもしてないし。

「ふう……あんたには分かんないのか。日本人じゃないもんね」

毎回おんなじことを言ってくるのでやられる側も飽きてくる。

バリエーション増やせよ。とか思ってくるわけで。

ただ先に言っておくけど、私はマゾじゃないから。

「そうね。私は純粋な日本人じゃない。ハーフだから」

「日本語通じてるよね？」

そっちのほうに通じてないんじゃないの。と言いたくなるのをこらえる。

「ちゃんと日本語で返事してるじゃん」

「さすが。キャバの娘だわ」

成り立たない会話を打ち切るように返事をする。

「そりゃどうも」

本当にバカばかりだ。

そんなことは言われ慣れた。

なのにそんなことばかり毎日言いに来る。

いい加減学べばいいのに。

鶏は3歩あるくと忘れるんだっけ。

じゃあ鶏以上ではあるね。

「もうキリないや。話通じてないんだもん」

話通じてないのはどっちですか……

「じゃあ諦めれば？」

「またね。あ……またもないか。もう死ぬんだもんね」

またか……

まあいいや。いつ何があっても平気だし。

今度は何が来るか。

なんだっけ前の……大学生ぐらいだったよな。

弱い……あっけなかったやつら。

私を犯したいならもう少し強くなってから来なさい。

……って無理か。

私に勝てるのはあいつだけ。

ながたはやて
永田颯

会いたくないなあ

「あれ？ 叶じゃね？」

「ああ。颯か。何してんのよこんなところで」

会いたくないと思った瞬間会ったし。

「ん？ 俺？」

相変わらずの馬鹿だ。

会いたくはなかったけど、会ったからといってがっかりもしない。
とりあえず会話をつなぐ。

「ほかに誰がいるの」

頭を抱えたように言ってみせると、思いだしたかのようにしゃべり

だした。

「頼まれたんだよ。んで、お前を探してた」

見当は付いた。ただ、あいつらが私たちのことを知っていたとしたらマズイことになる。

「あいつらか。いつ知ったんだよ……」

「さあ？　まあ。金はもらってないけどな。渡されたけどもらわなかった」

やっぱり金で買ったのか。どこから出てくるんだよそんな金。

「馬鹿だね。あんたなら成功できたかもしれないのに」

「んー。成功してもうれしくないし？」

意味深な笑みを浮かべているあいつが気に食わないので、あえて適当な返事をする。

「なにが……」

あいつは究極の馬鹿らしい。

いや。知ってたけど。

首をかしげてきょんとしている。

「まあでも。久々に会いたかったし？　お茶でもどう？」

「ばーか」

さっき仕掛けておいた魔雷針らくりまが爆破する。

「いつ仕掛けたの。こんな物騒なの」

幼稚園児を叱るかのように言うあいつに、幼稚園児のような言葉を返す。

「さっき？」

ふう。とため息をついて話し始める。

「まったく。俺じゃなきゃ死んでたでしょう」

「あんたじゃなきゃ魔雷針なんて使わないよ？」

そうでしょう？　と言わんばかりに言う私。

あいつは分かってましたという表情をして言う。

「だろうな。ナイフ一つで大丈夫ってところ？」

百連花火も発射。また無傷なんだろうけど。

「花火は人に向かってしちゃいけないって習わなかったの？」

「あんたは人を超えてるよ。十分」

火遊び注意は小学生までと付け足した。

あいつも、魔法使いみたいなものだから。

正式になんて言うのかは知らないけど。

「叶に言われたくないし」

「じゃあ帰るから」

会話を無理やり終わらせた。

んで、早足気味に帰ろうとしたら……

「俺、明日からおんなじクラスだからね」
「はあ?!」

明日からは大波乱の予報。

第二話 アカリ

「ほら。席に着け！」

担任が入ってくる。

周りの会話から考えるに、転校生が来るとか。おおよその見当はついてるけど。

「つと。早速だが、転校生を紹介する」

「うっそー」だの「どんな人？」だの騒ぐクラス。説明きいてりゃすぐわかるだろうが。

「ほら、静かにしろ。紹介しねーぞ？」

担任に言われて静かになる。

小学生かよ……

「永田くん。入って」

「はい」

んで、またざわつくわけだ。

……そうでもないか。

まあ、見た目はいいからね。

「はじめまして。永田颯です。よろしく」

「しばらくは斉藤！世話しろよ？」

「なんで私……」

「友達だから？」

「友達だった記憶はない」

「叶冷たい……」

周りがざわつく。

一番驚いてるのはいじめの首謀者。

ってことは知らなかったのか。

知ってたのは喧嘩が強いかその程度ってことだ。

んじゃあ、上手くはめたつもりだったんだろうな。

「じゃあ解散。チャイムまでには席に着いとけよ？」

「はい」

「なあ、叶？」

唐突に話しかけてくるあいつ。

適当にあしらうように返事をする。

「何？」

「案内して？」

何を言い出したのかと思った。

「たぶんあんたなら迷わないよ」

「ほめてくれるの。でも、一応案内して？」

ほめたつもりじゃないけど。

周りで「私だったら行くのに」とか言ってるのに頼めばいいのに。

「放課後ならあいてる」

「じゃあ放課後ねっ」

強制的に決められる。

まあ、私が空いてるって言ったからなんだけど。

「何あれ、冷たくない？」と野次られる。

まあ、それでいい。こいつとなれ合う気はない。

こんな悪魔とはね。

とたんに頭痛が走る。

「つつう……」

おんなじことが何度かあった。

あの事件のあと、颯と会ったときはよく起る片頭痛。

この頭痛が追いやった記憶を呼び戻す。

だからこそ、会いたくなかった。

天使で悪魔なあいつに。

唯一の私の灯だったあいつは、いきなり私の目の前から消えた。

「これ以上、叶を巻き込むわけにはいかないから」

そう言い残して。

それが今、目の前にいるわけだ。

まったくあいつの行動が読めない。

お昼になり、私はいつもの静かな空間。屋上にいた。

今日は快晴。雲ひとつない。

私の心の中とま逆の世界。

「叶？お昼一緒にどう？」

屋上まで来たあいつが言う。

ここまで来れる癖に、案内必要ってどういうことよ。

「私、お昼食べないから」

「あんたそれ以上痩せてどうするの。また俺に負けちゃうでしょ」

誰がダイエットだって言ったよ。と突っ込みたくなる。

「いつやったって結果は同じでしょ」

「いや、叶の仕掛け《トラップ》にはかありません」

自分で防いで、傷一つない奴が言ったところで説得力も何もない。

「昨日だってトラップ3つもやったのに無傷でしょ」

「いや、ひとつは気付けなかったよ」

ほら。と足の傷を見せる。もう治ってきてるし。

「みんながみんなこのくらいですんだら素晴らしいよ」

あいつの顔のすぐそばで小さな爆発が起こる。

「誰もいなくてよかったね」

と嫌味に笑ってみせる。

「だから、こんなものを人に向けて撃っちゃダメだって。怪我しちゃったでしょ？」

「大丈夫だよ。あんただから」

ふと思いつく。

やっぱりあいつと二人きりで話すと暖かくなる。

今でも私にとっての灯なんだなと痛感させられる。

あいつがいたから今までこれなんだなと。
あいつがまた来てくれたことで、希望が見えた気がした。

第三話 ミライ（前書き）

注意をいただけたので気にして書いてみました。
なので、前の文章と比べて「書き方が変わってる」というツツコミ
はやめてください。

第三話 ミライ

自分で自覚し始めてる時点でもう遅い。
完全にまた……

「ん？ 俺、何かヘン？」

こんなやつにハマってる。

今は放課後。約束した通り、学校を案内していく。

終始笑顔なあいつ。んで、いつもの如く面倒くさそうににらみを利かせる私。

まあ、あいつは気にしてないんだろうけど。

「なあ、旧校舎の方は？ 行かねえの？」

こいつは小学生か？ って思うくらいこんなことばかり。
次はどこがいいだの、ここは行かないのだの。

「行かない。多分今、入れないし」

旧校舎は今、耐震工事中。ぶっちゃけると、立て直し中。
要は旧校舎じゃなくて、新校舎になるわけだ。

「そか。じゃあ、終わり？」

物足りないような表情のあいつ。十分回ったと思うんだけど。
もう外は薄暗いし、廊下とかにももうほとんど人居ないし。

「うん。じゃあ、帰るから」
「まって」

急に腕をつかまれる。少なくとも惹かれつつある男子につかまれたわけだ。

勢いでぶつきらばうな言葉を投げる。

「何？ 早く帰りたいんだけど」
「そっか。うん。ごめん」

いきなり悲しそうな。さびしそうな顔をするあいつ。
いくら私でも、放っておけない。

「なんか話しあったんじゃないの？ 引き止めておいてごめんで帰すって、気になって帰れないでしょ？」

少し恥ずかしそうに。でもうれしそうに口をひらく。

「叶は俺のこと嫌いなのか？」
「え……」

言葉を失った。

どちらかといえば好きなのに。そんな風にとられるようなことをしていたのかと思うと、すごく悔しくて。
溜息のようにあいつが言葉をこぼす。

「だよね……」

そう言ってまた話し始める。

「でも、俺は好きだよ。叶が」

夢だと思った。あいつが私なんか告白なんてするはずないと。ほっぺをつねってみる。

「痛っ……」

一瞬きよとしたあいつ。でもすぐに理解したように爆笑しはじめた。

「何で笑うのよ！ 私は嫌いなわけじゃないけど……」

言葉を詰まらせた私の、つねったあとの残るほっぺに不思議な感触。目の前にいたはずのあいつが見えなくなっていて。

笑いながら一言、

「叶？ よろしくね？」

こういったことに免疫のない私。おきまりのように真っ赤になって叫ぶ

「馬鹿颯っ！ 帰るっ」

少し歩くと、周りが静かになる。

ここまできると少しは冷静に考えられるようになってきていた。

「明日からどんな顔して学校行けばいいのよ……」

こうなってくると自分の性格をとことん恨む。

ひねくれててわがままで、素直じゃないし。おまけに可愛くもない

し。

本当にさっきの言葉がリピートすると共に、夢ではないかと疑ってしまう。

頭の中で、爆発しそうなほど悩んでいるうちに家に着いた。

「ただいま」

いちおう声をかける。返事ははじめから期待してはいないから、なくとも気にならない。

「おねえ、お帰りっ」

妹の楓が出てきて声をかけてくれる。言葉の割に顔が笑っていない。いつものことだからおおよその見当はつくけど、一応聞いてみる。

「楓、ただいま。お母さんたちは？」

案の定、黙り込んでしまった。やっぱりかのため息をこぼし、リビングへ向かう。

両親は魔法を使ってしまう私を嫌っている。いや、ちがうな。恐れている。というべきかも。

「ただいま。お母さん、お父さん」

一瞬間ができる。たかが一瞬の出来事でも、息がつまる。

「お父さんたち、離婚するから。どっちに行くのか決めなさい」

いきなりそんなことを言い出す。両方が両方で私を押しつけ合ったんだろう。

「私が出て行けば離婚しなくて済む？　あなたたちと私は離婚で一応解決しても、楓はどうなるの？　関係のない楓まで巻き添え？」

「それは……」

言葉を濁らせる。

「そんなのとづくにわかっていたわ。お父さん、お母さん。今までお世話になりました。楓をよろしくね？」

生活は……と独り言のように言うお母さんに向けて一言。

「もう高校生だよ。バイトもしてる。しかも私は特待で入ってるから学費は掛からないし。なんとかなるよ」

ほっとした顔を一瞬みせた両親。ふと悲しそうな表情を作り、話し始める。

「お前が決めたんなら……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4885h/>

Moon-Drop

2010年10月11日03時10分発行